

平成26年度（第36回）

少年の主張 石川県大会

発表記録集

伝えよう！21世紀を生きる君たちの熱いメッセージを



と き ■ 平成26年9月27日(土)

と ころ ■ 石川県青少年総合研修センター

石川県 石川県教育委員会 石川県健民運動推進本部

はじめに

昭和五十四年国際児童年を記念してはじめられた少年の主張石川県大会も、たくさんの方々を支えられ、今年で三十六回目を迎えることができました。

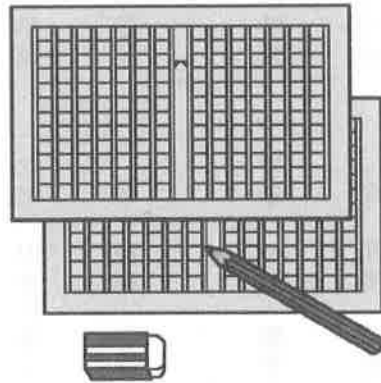
この大会は、中学生が、日常生活の中での体験や考えを自身自身の言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、中学生世代の社会参加意識の醸成を図るとともに、多くの大人に現代の中学生への理解を深めてもらうことを目的として開催しております。

本大会は、加賀地区、石川中央地区、金沢市地区、能登地区の四地区から選ばれた十六名の中学生が、それぞれの体験から真剣に考えたことを力強く発表し、聴衆に大きな感動を与えました。

この記録集は、その十六名の主張を取りまとめたものです。一人でも多くの方々に読んでいただき、中学生が日ごろどのように考え生きようとしているのかをご理解いただき、今後の青少年健全育成推進の一助としてご活用いただければ幸いです。

終わりに、地区大会をはじめ、この大会のためにご尽力いただきました多数の皆様には厚くお礼を申し上げます。

石川県健民運動推進本部



もくじ

◎はじめに

◎大会発表作品

最優秀賞

青年よ、自由という名のもとに責任を持って

七尾市立七尾東部中学校 三年 左藤寿久理……………3

優秀賞

命の箱

七尾市立御祓中学校 二年 山本日菜子……………4

私が変わった瞬間

加賀市立山中中学校 三年 後藤 春香……………5

奨励賞

加賀温泉郷の今

加賀市立山代中学校 三年 神田 潤季……………6

輝く未来

輪島市立門前中学校 三年 星野 泰代……………7

私の思いを強くする

小松市立御幸中学校 三年 坂下 未宙……………8

伝えるということ

白山市立白嶺中学校 三年 笹山明花里……………9

児童労働く世界の子供たち

中能登町立中能登中学校 三年 日下 和泉……………10

伝え方にも思いやりを

石川県立金沢錦丘中学校 三年 南部 未陽……………11

「つながり」ってなんだろう

金沢市立泉中学校 三年 堀 恭子……………12

一言の大切さ

かほく市立宇ノ気中学校 三年 北井湧之輔……………13

「努力」と「感謝」

かほく市立宇ノ気中学校 三年 干場 結奈……………14

大切なモノ

白山市立笠間中学校 二年 上田 裕衣……………15

夢・心の糧として

金沢市立港中学校 三年 川野優里亜……………16

「ボン」から始まったこと

北陸学院中学校 二年 吉田美佳子……………17

人をつなぐ挨拶

川北町立川北中学校 三年 佐々木尊理……………18

(優秀賞、奨励賞は発表順に掲載)

◎審査員講評……………19

石川県教育委員会事務局学校指導課 課参事 才鷹 一博

◎少年の主張石川県大会概要……………20

◎石川県大会審査基準……………21

◎地区大会概要……………22

◎平成26年度少年の主張全国大会

私の主張2014 内閣総理大臣賞受賞作品……………26



私は今着ている制服に不満がある。スカートや靴下の長さ、ネクタイの高さなど校則はいちいちダサイ。夏に着るカッターシャツは汗の吸収性が悪い。冬のセーラー服は寒く、伸縮性が貧しいので動きにくい。

加えて衝撃的だったことは、三十年前の母と全く同じ形だということである。つまり、何十年も前から変化していないのだ。

服の流行の変化はとどまることを知らないのに我らがセーラー服は時が止まっているかのようである。

三年生の私がこんなふう語ってしまうと下級生に悪影響を及ぼし、先生方に怒られてしまいそうではあるが、ここではつきりつけ加えておきたい。私は不満があるからといって校則違反をするつもりなど全くないし、実はセーラー服を非常に可愛いと思っている。先程述べた不満を差し引いたとしても、確かにセーラー服は可愛い。

今の年齢の私達にしか着こなせない特別な代物である。もしかしたらセーラー服とは、流行を永遠に追う必要のない完成されたデザインなのかもしれない。であるなら、何十年も前から同じであることには納得がいく。

では、校則はどうであろうか。その基本的な内容は、これもまた何十年と変わっていないようである。

そもそも制服は私達に協調性を持たせ、この学校の一員として団結し行動しようとするエネルギーを生み出す力があるように思われる。先日行われた陸上競技大会。七尾市にあるどの中学校の生徒も体操服姿で気持ち一つにし、すばらしい応援合戦を繰り広げた。スカートや靴下の長さが必ずしもそのエネルギーを奪い去るとは思えない。がしかし、未熟な私達学生が学校という枠の中で同じ方向に向って進むうとするには何らかの基準が必要であることもうなずける。

七尾東部卒業の母に昔の校則について尋ねてみたら、こんなことを話してくれた。中学の卒業式を終えたばかりの春休み、先生に会いに学校へ行こうとして母は「制服じゃなくていいんだ。」と改めて思い、

自由を感じた。そして何を着ればいいのか考えているうちに不安になってしまったという。あの不安の正体が一体何だったのかはもう少し大人になってからわかったそうだ。

校則も制服も窮屈だけど、その枠の中にいけば何も考えなくてもよかった。ではその枠をすつかりはずさずされたしまった時、未熟な私達は果して自分の力だけで正しい道を選択できるのだろうか。自由になるということとは、自分が決めていかなければならないということでもあり、そしてその結果に責任を負う覚悟がいる。

そのためにも今は与えられた校則を自分から全うしてみようと決めている。私がセーラー服を卒業した時、自由という名の責任に挑む人生の旅がきつと始まるから。





親からもらったもの、まずは「命。」命は親から一番はじめにもらった大切なものです。命がなければ今、ここに存在していることはできません。しかし命だけではただの空箱。私は命という名のはかりしれない大きな箱にいろんなものをつめてもらい生まれ、成長してきたのだと思います。

次に「身長。」この低い身長は母からもらったものです。私は学年の女子の中で一番チビなのですが、母も学生の頃、学年で二番目に低かったそうです。

それから「運動オンチ」走ることに関しては、短距離でも長距離でもいつもビリです。もらったものはいいいものばかりではありません。

しかし、それらといっしょに「日菜子」という名前ももらいました。「春のやわらかな日差しを受けて菜の花が畑一面を黄色に染めている頃に生まれた女の子。」またそんな菜の花のような女の子になってほしいという父の思いが詰まった自慢の名前です。

さらにいろいろな「きっかけ」ももらいました。特に幼い頃にももらったきっかけによって今の私がいるような気がします。例えば「読書。」私には幼い頃からいつも身近に本と本を読んでくれる人がいたので、今でも読書は大好きです。本から得たことだってたくさんあります。

しかし、今の私はもらったものがただつまってできているわけではありません。もらったものに自分の経験を積み上げて今の私ができるのです。例えば「習い事。」あれは五歳になるときです。習い事をしたと言う私を両親はピアノ教室と民謡教室に見学に連れて行ってくれました。すると私は「民謡教室の方がいいな。民謡教室に行きたい。」と言って次の週からさっそくおけいこに行ったそうです。しかし運動オンチな私は、速いテンポの激しい動きになるとどうしても遅れてしまいました。片足ですばやくしゃがむときもバランスを崩してしまい、うまくいきません。私は悔しくて家でもビデオを見ながら毎日必死に練習しました。すると年数を重ねるごとにいろんな動きも

できるようになり、十年経った今でも民謡教室に通っています。そして父からもらった「がんこ。」「がんこやねえ。」とよく言われますが、それと同じだけ「根気強いねえ。」とも言われます。短所も自分の経験の積み上げで長所になるのかもしれない。もらったものをどう積み上げていくかによって私ができるいくのだと思います。「がんこ」だって「根気強い」に変わります。運動オンチな私ですが、その根気強さで、体育の五分間走では一年の春に比べ二百メートルも伸びました。みんなにはまだまだ届きませんが、運動オンチなりに伸びています。

親からもらったもの、それは、プラスのもの、マイナスのもの。変えられるもの、代えられないものさまざまです。それらと私は十四年間つき合ってきました。そうして出来上がったのが今の私です。これからも、マイナスのものは、少しでも自分がプラスにして積み上げていきたいなと思っています。いいものも悪いものも親からもらったかけがえのないものです。他人と比べてうらやましく思ったり、落ち込んでもどうにもなりません。私がまるごと受けとめて、自分の色をつけ、積み上げ、日菜子らしさがたくさん詰まった命の箱にしていきます。





私はあることをきっかけに困っている人に対しての接し方を変えることができました。

以前、私はいつものようにテニス帰りに山中の温泉に行きました。すると、湯あたりをしてしまったおばあちゃんが脱衣所の長椅子に横になっていました。正直私は迷惑だなあと思いつつも何も言わずにいました。そのときです。二人の女性の話し声が聞こえてきました。「なんでこんなところで寝とるん？」「人のことも考えて欲しいわ。」と。私はそのとき、『あなたたちは、人のことを考えないのでですか。』『わざわざ口にして、自分の立場になったときそう言われたら、悲しくありませんか』と、怒りでいっぱいでした。すると、おばあちゃんはずつくり体を起こすと、目が合った私に、「ごめんね。年寄りですぐつらくなってしまうたんや。」と笑顔で言いました。私は笑顔で「全然」としか答えることができませんでした。あのとき、「大丈夫ですか」となぜ言えなかったのでしょうか。その一言が出なかったことを今でも後悔しています。

私はいつもそうです。手が不自由でカギを開けられず困っている人がいる。物を持ちきれずに困っている人がいる。一人で泣いている人がいる。歩けずに困っている目の不自由な人がいる。今までたくさん困っている人を見てきましたが、私の行動はいつも「見て見ぬふり」。たった一言の「大丈夫ですか。」が言おうと思っても、いざとなると何かに抑えられて出てこなくなるのです。

おばあちゃんが起き上がったとき、一人の女性が「大丈夫ですか。今、フロントからお水をいただいでくるので、横になっていてください。」と言いフロントに走って行きました。すると、おばあちゃんは、水を持ってきた女性に「ありがとうございます。ありがとうございます。」と何回も何回も頭を下げていました。私は初めて人が人を助けるところを目の当たりにして、いつか私もこういう風になれたらいいなと思いました。誰かが困っていたとき、そつと手を差し伸べてあげられる人になりたいと思いました。この女性に出会って、今まで自分が

取っていた行動に対して、馬鹿だなあと思いました。たった一言ぐらいい言えればいいのに、恥ずかしさに負ける自分が嫌になりました。

そして、決めました。困った人を見かけたとき、次は絶対に「大丈夫ですか。」と声を掛けよう。

あるとき、車イスが段差にひっかかって困っている人がいました。私は『今が人を助けられるとき。』と思い、「押ししますよ。」と、車イスの後ろを押ししました。すると、その人は目に涙をいっぱいためて、「ありがとうございます。こんなに若いのに。みんな横を通りすぎていくのに、押ししてくれたのは、あなただけや。」と言いました。私のほうも、自分を変えることができたとは本当によかったです。お風呂場でのあの経験がなかったら、こんな自分はいないなと思えました。これからはどこかで、困っている人に出会うかもしれないかもしれません。でも、今の自分なら、そつと手を差し伸べられる人になれるような気がします。そして、私が助けられたとき、「ありがとうございます」と笑顔で言いたいです。





奨励賞

加賀温泉郷の今

加賀市立山中中学校 三年 神田 潤季

僕の父は、粟津温泉にある旅館で、料理人として働いています。父は土日に関係なく、毎日朝早く出勤し、真夜中に家に帰ってきます。僕の目から見ても、父の仕事の大変さが伝わってきます。

以前父に、「旅館の仕事で何が一番大変なん？」と聞いたことがあります。その時父は、「加賀の特産物を使い、工夫された料理を作ることで、全国から来られる観光客の方に粟津温泉の魅力を伝える事が一番大変なんや。」と言っていました。しかし、そんな努力を続けていても、父の働いている粟津温泉では観光客の数は、昔と比べて減ってきているそうです。

粟津温泉だけでなく山代、山中、片山津温泉でも観光客の数は減少しています。特に山代温泉は有名な温泉街で、昔は全国から年間百万人以上の観光客の方が訪れていたと聞きました。しかし、今では最盛期の半分ほどの温泉客しかなく、観光客も激減しています。現在ある温泉宿も県外資本が入り、地元旅館は苦しい状況が続いています。

僕たち山代中学校では、二年の修学旅行で山代ピールに取り組みました。僕は、旅行先の京都で山代温泉の宣伝が入ったポケットティッシュを外国人の観光客や京都の人たちに配りました。言葉が通じない外国人の方に、山代の良さを宣伝することはとても難しかったことを覚えています。しかし、この活動を通して、一人でも多くの方が山代温泉を訪れてくれると思えば、とてもやりがいのある活動だと思いました。

さらに三年生では、地元で活躍する人たちのお話を聞く機会がありました。お話をされた人たちは、「山代温泉の現状を変えていきたい」という気持ちで、この温泉の活性化に取り組んでいる方ばかりでした。その中でも特に心が動かされたのが「レディ・カガ」の活動でした。レディ・カガの皆さんはインターネットでの山代温泉の情報発信を中心に、いろいろな所に活動の幅を広げていっているそうです。また、その他にも山代大田楽や菖蒲湯祭りの活動に携わる方のお話も聴きました。このような活動が全国に広まっていけば、たくさんの方が山代温泉の魅力を知ることができ、「山代温泉に行ってみようかな」

と思ってくることができると思います。

来年三月十四日には、北陸新幹線が開業します。他県から石川県に來られる観光客の方も、きっと増えるに違いありません。それによって、加賀温泉郷にも多くの観光客が来てくれると信じています。そして、今よりもっと賑やかで、活気づいた加賀温泉郷になると思います。そのためには、もっと目新しいものを考える必要があるのかもしれない。しかしそうは言っても、このような活動ができるのは大人の人たちばかりで、僕のような中学生には、そんな大がかりなことではありません。それでも僕は、この温泉街の活性化のために、少しでも協力したいと思っています。

僕たちの中学校では、四月からの総合的な学習の時間で、どのような形で地域貢献ができるか考え、取り組んできました。僕たちのグループは、観光協会の人と協力して、地元の人しか知らない情報を、ホームページで発信しようと思っています。そのために、友人たちと集まり、温泉街を調べ、写真を撮り、「山代見どころマップ」を現在作っています。この活動の中で、地元の人と交流することもできました。僕たちがこれから発信するマップで、地域の方が元気になつてもらえればいいなと思っています。中学生の自分たちがこのような活動をする事によって、地域全体がもっと活気づくはず。また、僕たち中学生の人間関係も豊かになつていくと思います。

今回、地元温泉街のために、こんなに努力している人たちの存在を知りました。そして、何より温泉自体が僕たちの宝物だということです。僕は、加賀温泉郷はこれからきつといい方向に進んでいくと信じています。地元の未来を担う僕たちが頑張れば、加賀温泉郷は昔のような活気ある温泉街へと戻っていけると確信しています。





それは、小学校三年生の時の出会いがきっかけでした。
私は、喘息で小学校を休む事が多く、何をすることも消極的になり、自分を出す事が苦手でした。

そんな時、オーストラリアから、里帰りするお母さんと一緒にマックスとフィリックスの兄弟が来て、少しの間、同じ小学校に通いました。同級生で同じクラスだったマックスは、片言の日本語しか話せなかったのであまりクラスに馴染めず寂しそうです。「話したい。」でも、恥ずかしがり屋の私は、なかなか話しかける事ができません。しかし、母同士が仲良くなり、互いの家を行き来するうちに、楽しく遊べるようになったのです。皆とも仲良くなり、学校に来るのが楽しそうなマックス。言葉が通じなくても、心を開くと打ち解ける事ができるんだ、と実感し、嬉しくなりました。しかし、やはり、二人に英語で会話をされると、全く理解できません。英語を話せるようになって、直接コミュニケーションをとりたい、と強く思いました。英会話を習い始めたのは、その時からです。

二人と過ごす中で、日本とオーストラリアの違いを感じる事が沢山ありました。二人はご飯を食べた後に、日本語で「ご馳走様。」と言っていました。「ご馳走様」は英語で何て言うの？私が聞くと、二人は言いました。「美味しさを表す yum」などの言葉はあるけれど、「ご馳走様」に代わる言葉は無いんだ。」と。私達が習慣として何気無く言っている言葉は、実はとても大切で意味の深い言葉なのだと思えて分かり、「いただきます」「ご馳走様」などの挨拶を以前より感謝を込めて言えるようになりました。また、ある時、二人は口を揃えて言いました。「民族間の争いや宗教間の対立がほとんど無い日本がとても羨しい。」それを聞いた時、多民族国家で暮らす二人は、色んな事を考え、大変さを背負って生きているのだとハッとさせられました。平和である事があたり前の毎日。日本で暮らせる事は恵まれているんだとしみじみ実感しました。二人のおかげで日本には世界に誇れるものが沢山あると気付かされました。

私は、世界への憧ればかりを抱いていましたが、海外の人と接するには、もっともっと日本を知る事も大事だと感じました。

自分で考え、のびのびと行動する二人。そんな二人と接していくうちに、私もありのままの自分でいいんだと思えるようになり、失敗を恐れずに挑戦し、積極的に意見を伝えられるようになってきました。二人との出会いから感じた事。それは、誰かと繋がりを持つと、人生の可能性が広がるという事です。

私は、将来、日本と外国を繋ぐ架け橋となり、日本の良き伝統文化を伝えたいと思っています。その夢に向かって、英語検定を受けたり、ALTの先生や外国の人と積極的に話したりして頑張っているとこです。

コミュニケーション。それは、夢や希望を与えてくれるもの。今、コミュニケーションで悩んでいる人に伝えたいです。「自分だけの世界で悩まず、広い世界に出てみましょう。きっと進む道が拓けます。人と接する事が楽しくなりますよ。」と。

皆さん、色々な出会いが人を大きくしてくれます。今、努力している事はきっと将来に繋がります。より良いコミュニケーションをとっていきましょう。これからの未来を担う私達の人生がより豊かなものになるように。





『安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませぬから』
 広島慰霊碑にはそう刻まれています。修学旅行で訪れた広島で、私の平和に対する考え方が大きく変わりました。

二年生のときから、戦争に関する資料やDVDを見たり、実際に戦争を体験された方からお話を聞いたりしました。中には、目を背けたくなるような写真や、話を聞くだけでも恐ろしくなるような様子もありました。半年間の学習を経て私は、「広島で実物を見てこよう」「みんなが平和への思いをもたなければならない」と感じ、そんな気持ちで広島へ向かいました。

広島では、資料館の見学や慰霊碑めぐり、折り鶴を折り続けた平和の子の像が見守る中、平和集会を行いました。その中で、私たちの班の碑めぐりガイドをして下さった、広島被爆者後援会の菅さんのある問いかけが、私の平和に対する考え方を大きく変えたのです。

「原爆死者慰霊碑に刻まれている『安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませぬから』という言葉は誰の言葉だと思いますか。」菅さんの問いかけに私たちは首をかしげながら、「アメリカ」「日本」など、戦争に関わった国をあげていきました。菅さんは、その一つ一つの答えにうなずいたあと、こう言葉を続けられました。

「これは、慰霊碑の前に立つ人、一人一人の言葉です。」

私は、この言葉にショックを受けました。これまで「戦争」や「平和」について学んできたけれど、本当に自分のこととして考えていなかったと気づかされたのです。今まで学んできた「戦争」や「平和」は、結局、一つの知識として学んでいただけで、「戦争」を起こすのは国や社会であり、自分からは遠いことのように捉えていました。「平和」をもたらずのも同じです。少なくとも「そのために自分が」とは、思っていませんでした。

『安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませぬから』この言葉の主語は、「今、ここに立っている私」「慰霊碑の前に立つ私」なのです。決して「他の誰か」ではありません。過ちを繰り返さない。そして「そ

れを実行するのは自分自身だ」ということこそが大切なのです。私は菅さんの一言から、平和を誓うのはまさに自分だということを感じ、その責任の重さを感じました。

そうはいっても、今の私にできることなんてほんのわずか、わずかなないくらいです。しかし、私が戦争について知り、平和を願い何ができるかと考えたように、友達や、みんなが、世界の一人一人の「私」がそう考えれば、戦争をなくせます。世界は「だれか」ではなく、それぞれの「私」が集まってできているのですから。

私たちは、戦争におびやかされることもなく、当たり前のように学校へ行き、友達や家族がいて、十分「平和」に暮らしています。でも、ニュースを見てみれば、苦しんでいる人がたくさんいて、毎日笑顔で送れない人がたくさんいます。

今年の広島原爆の日、菅さんの言葉を思い出しました。あの時の気持ちを忘れず、これから、さまざまな問題に対して、まず自分から知ろうとする姿勢を持ち続けます。そして知り、考えることで、自分の思いを強くしていきます。菅さんに気づかせてもらった、私が主語であることを、周りの人に伝えていきたいです。

今ある平和を守り、広げていくことが、生きている私達の責任なのです。





奨励賞 伝えるということ

白山市立白嶺中学校 三年 笹山 明花里

学校生活、そして大人になってからも必ず与えられるであろう、話し合いの場。その中で皆さんは、自分の意見、思いをしっかりと伝えられているでしょうか。

私は「いいえ」です。委員会活動、学級活動など、様々な機会の中で、私が自分の意見を自分から述べたのは、何回だったでしょう。

ある日のことでした。少しでも意見を言える人になれたらいいなと立候補して入った生徒会執行部。その日「今までやったことのない、新しい取り組みをしよう」という話し合いをしました。早速一つの案が出され、みんなの口から自然と賛否の言葉が出始めます。

「こんなのはどう。」

「あれも良いと思うけどなあ。」

しかし私はというと、賛否の言葉すらろくに言えないまま、口もほとんど開かないまま話し合いを終えてしまったのです。なんて情けないことでしょうか。授業中も先生に

「ここがこうなるのはどうしてでしょう。」

などと聞かれても、積極的に応えることができません。とにかく、自分の意見や思いを口に出せないのです。話し合いのときは憂鬱でなりません。

しかし、こんな私にも「言えないのがつらい。」「何でもはっきり言える人がうらやましい。」という思いはあるのです。

なぜ言えないのでしょうか。私の理由は二つあります。一つ目は「考えがはっきりしないから」です。考えてみても、思いつかなかつたり、うまくまとめられなかつたりすることが多いのです。そして二つ目は「間違えるのが怖い。それに対して何か言われるのが恥ずかしいから」です。

ならば、話すマニュアルや原稿があれば良いのでしょうか。これなら私でもできるでしょう。しかし、それは自分の考えや思いではありません。私は自分の考えではないことを話すロボットにはなりたくありません。また、文字にして伝えることも一つの方法です。しかし、

その場で身振りをつけたり、抑揚をつけたりして話す言葉は、文字より伝わりやすいように思います。

話し合いは、人と違う意見を述べることから始まり、それを重ねてより良い結論へと向かうものです。話し合つてこそ、みんなが納得し、実現に結びつくのだと思います。こう考えてみると、話し合いで自分の意見や思いを口に出して伝えるのは、とても大切なことであると感じます。

ではどうすれば自分の意見や思いを、自分の口で伝えられるようになるのでしょうか。私は克服法を考えてみました。まず、自分の考えをはっきりもつために、新聞を読む、家族とよく会話をする、などの方法で様々な知識を取り入れ、物事をしっかりと考える習慣をつけること。そして、恥ずかしいと思う考え方を変えることです。その場で間違つても、それが心に残つて、かえつて間違いをなくすことに成功するかもしれません。このように、実行することは簡単ではないと思いますが、少しでも自分の意見や思いを、勇気を出して、自分の口で堂々と言えるようになるよう、努力していきたいと思えます。

最近では、まだとてもささいなことですが、いくつかの教科では授業中、以前より発言できるようになりました。これからは、ここで立ち止まらず、意識せずとも自然と意見や思いを周りに伝えられる人を目指していきたいです。





皆さんは、「児童労働」という言葉を知っていますか。児童労働と呼ばれる労働は、子供の心や体の健康に害を与えたり、子供たちに与えられるはずの教育の機会を奪ったりする、あらゆる種類の労働を指します。

私は、先生に紹介して頂いた、ある本との出会いで、信じがたい事実を知り、より深く、児童労働について考える機会を得る事ができました。その本の名は、『わたし8歳、カカオ畑で働き続けて』。

世界には、日本の全人口の約二倍にも相当する数の児童労働者がいるといえます。学校にも行けず、カカオ畑で働き、固いサッカーボールを縫っている子供。幼い身体には危険すぎる、菓をまいている子供。働く子供たちのなかには、私たちのような十代ではなく、まだ本当に幼い、五歳にも満たない子供たちもいるのです。その子たちの親が病気になる、子どもたちの収入で一家を支えることとなります。家族の生活のために働かざるを得ないのです。

しかし、過酷な労働とは裏腹に、その収入は満足できるものではありません。サッカーボールを縫う仕事は、一個仕上げて日本円にして約十五円。子供が一日に仕上げられるサッカーボールはせいぜい三個くらいですので、一日中働き続けても五十円に満たない収入なのです。

本の中で、印象に残った言葉があります。ある子供が、現地にいた日本人に、こう質問しました。

「日本の子どもたちは、どんなお仕事をしているの?」

私は、ひどい罪悪感に襲われました。彼らがもし、私たちの現在の生活を知ったらどう思うでしょうか。このような恵まれた状況下で、私たちは少しよくばりになってはいないでしょうか。少なくとも、今の私は甘えていると、痛感しました。私たちは今与えられている環境に感謝をしなければいけません。

私はまだ、将来の夢を決めることができていません。自分に何が向いているのかわからないのです。

しかし、これから努力をすれば、夢を実現できるといふ、ありがたい環境にいます。直接、児童労働について何ができるかわからないけれど、世界の子供たちのために、できることをしていきたい、大人になりたいです。子供は未来の社会を担う、大切な財産です。私は偶然、先進国に生まれ育ちました。先進国に生きる人間として、世界に貢献したいです。

私は一人の先生から薦められた一冊の本で、心の持ち方や、社会を視る目が変わったように思います。

私たちは、大人の言葉を、なかなか心を開いて聴くことができない部分があります。

しかし、人生の先輩が必死に伝えようとしてくれているメッセージに耳を傾け、受け入れていくことで道が開くことがあります。今回、私は「児童労働」という世界を知ることができました。日々、人生のキーポイントになる言葉は溢れています。

皆さんも、心を開き、耳を傾け、視野を広げてみませんか。





「未陽はなんでもはっきり言うから可愛い。」

これは、私が友達に言われた言葉です。これを言われたとき、私は「なんで?」と思いました。はっきりと自分の意見を言うことは大切で、正しいことだと思っていたからです。相手に自分の意見を伝えることが、なぜ可愛いと言われるのでしょうか。私には分かりませんでした。私は「可愛い」と言われてから、あまりはつきりとものを言わないように心がけていました。可愛い人、思いやりがない人と言われるのが嫌だったからです。しかし、話し合いの最中、別の友達から「もう! はつきり言つてよ!」と言われることがありました。そのとき、私は驚きました。そして、自分がどのような態度をとればいいのか、私にはわかりませんでした。どうして友達に可愛いと言われてしまったのか。どうすれば相手を傷ついたり、怒らせることなく自分の意見をしっかりと伝えられるのかを考えましたが、なかなか答えを導き出すことができませんでした。

悩んでいる私に、「はつきり言うことは悪いことじゃないけれど、伝え方が重要なんだよ。伝え方が悪いと、相手は自分を批判されてしまうような気持ちになってしまうよ。」とアドバイスをくれる友達がいました。その友達には、自分の意見をはつきりと伝えていきます。そして、はつきり言いながらも、友達の意見にも、しっかりと耳を傾けています。ものごとを一人で判断するのではなく、相手の言葉を、耳で、目で、心で受け止め、その内容についてしっかりと自分の意見を返しているのです。相手のことを本当に考えるのなら、相手を傷つけないような言い方を工夫することも大切にして、相手の意見を受け止めたとき、相手を送ることが大切なのではないかと私に考えさせてくれました。相手の表情を見て、話の内容をどう受け止めているかを考えて、うなずいたり、呼びかけたりして、私も話をするにしています。相手の反応に自分も反応すること、そこがスタート地点だと思っただけです。

私は今、生徒会の役員をしています。学年集会や全校生徒の前など、大勢の人の前で話すことがとても多いです。そして、話し方を意識し

ていても、相手に思いを伝えることの難しさを痛感することがあります。私は、大きな声ではつきりと話すことや、一人一人の表情を見て、相手がどう受け止めているのかを考えながら話すようにしています。そうすることで、自分の考えを理解してほしいのです。

私たちがはつきりとものを言うことを躊躇するのは、そうすることで相手を傷つけてしまうことを恐れているからです。ですが、それを恐れて、意見を言わなければ、誤解を招いたり、良い方に物事が進まないこともあるのではないのでしょうか。物事は、一人で判断するのはなく、皆で話し合つて検討することで、前に進むことにつながると思います。そして、皆で検討するためには、自分の意見をはつきり伝えることも必要です。伝え方を工夫し、相手の意見を受け入れ、自分の考えを出し合うという風にすれば、相手が傷つくことはないのですから。はつきりとものを言うことは、決して相手を批判しているのではないと思います。私はもう、はつきり言うことを恐れませんが、互いに意見を交流し合うことが、新しいものを生み出していくのだと考えています。

自分の意見をはつきりと伝え、相手の言葉を受け止めて、互いに意見を尊重し合う、それが、互いの意見を深め、物事を皆で解決するための、「伝え方の思いやり」だと思っています。伝え方に思いやりを。私はこれからも、自分の意見をはつきりと伝えていきたいです。





みなさんにとって人との「つながり」とはなんですか。例えば夏休みのラジオ体操。会場に行つて、地域の人と「おはようございます」と挨拶を交わし、一緒に体操をする。こんな活動も「つながり」の一つです。その一方で、直接会わなくても「つながる」ことができる代表的なものに、ゲームアプリやSNSが挙げられます。ところで、みなさんはSNSを利用していますか。

身近な人から見ず知らずの人まで、多くの人と「つながる」ことができるSNS。実は、二〇一一年の東日本大震災では、被害の実態把握を担ったのがSNSでした。多くの被災者が発信したコトバに対し、多くの人が応え、励ましのコトバを送りました。SNSが災害時の実態を正確に伝え、的確な救援のために大きな力を発揮できることを社会に証明したのです。

私自身、去年からSNSを利用し始めました。既に複数の友達が利用していて、仲間になりたい、と思つたからです。朝起きてからご飯を食べるまでの間。学校や塾が終わつたあと、どんな時間でも利用できるそれが気に入り、いっぺんにのめりこみました。当然、家族からは「長時間やりすぎだ」と注意されました。しかし、その度に「なんで」という思いがこみあげ、素直に言うことが聞けない日が続きました。そんなある時、私の知らないアドレスのメールが一件届きました。誰だろうと思つて見ると、「私の友達の友達」と名乗る人物からでした。一見、親しげに見えて、実は正体が不明なメール。どこで自分の情報もれたのか。名前を明かさないうその人は誰なのか。私は、言葉では言い表せない恐怖に襲われました。それでも、私はSNSをやめることができませんでした。なぜなら、友達との関係が壊れることを恐れていたからです。もしやめたら、友達から「一緒に話したくないん？」と思われてしまうのが嫌だつたからです。こうして私は、自分でも気付かないうちに、ゆつくりと、SNSに毒されていきました。

そんな私を救つてくれたものがあります。それは、ある新聞記事に載つていたスマホを使うための「十八の約束」です。それには、十代

の子供がはじめて情報端末を手にしたとき、親が子供に守ってほしいことが書かれています。「あなたの周りで起こることをよく見てください。窓の外を見て鳥の声を聞いて散歩に出かけ、知らない人とも話すようにしなさい。グーグルに頼らないでください」これを初めて読んだとき、強い衝撃を受けました。目の前の画面にとらわれ、周りが見えていなかった自分に喝を入れられたように感じたからです。SNSのつながりにしぼられてちゃいけない。身近な人と直接会話し、行動すること。それこそが「つながり」なんだと気付かされました。

七月二十八日の金沢市、絆の日の活動で、小学生と中学生が共に小学校の校舎を掃除する機会がありました。はじめはどちらも緊張していました。しかし、掃除のやり方を教えてもらうことがきっかけで、初めて会つた小学生たちと、いつの間にかたくさん会話をしながら、掃除に励んでいました。共に笑顔がこぼれ、嬉しさを感じました。私たちの校区で、まさに、新たな絆が生まれ、「つながる」ことの喜びを感じられた一日となりました。

親の世代には無かつたSNSの普及。それは、コミュニケーションの基本となりつつあります。しかし、画面から目を離し、周囲を見渡すと、たくさんの方がいます。家族、先生、友達、地域の人、みなさんは誰と直接会話をしましたか。どのくらいの時間を共にすごしていますか。もつと、もつとつながりたいと思いませんか。私は、これからSNSと上手な付き合い方を考えつつ、何よりも直接会話し、行動することを大切にしていきたいです。





奨励賞

一言の大切さ

かほく市立宇ノ気中学校 三年 北井 湧之輔

今年の春、学校を早退して病院に向かった。

「お婆さんが今、危ない状態なので今すぐ準備をしてください。」と息を切らして走ってきた担任の先生に伝えられた。

婆ちゃんが「胸が痛い」と言い始めたのは入院する数日前の事だった。病名は何だったのか、正直覚えていない。

婆ちゃんは僕が生まれて、中学三年生になるまで、僕の成長を見守ってくれた。小さい頃、説教もよくされ、追いかけられたこともあった。すぐく生き生きとした、しつかり者の婆ちゃんだった。入院してからも婆ちゃんはよくしゃべっていたそう。僕はそんな話を聞いて、「まだ婆ちゃんは死なないんだらう。このまま退院してくるのではなにか。」と少し安心していた。

しかし、現実はそのような僕のガラスのような考えを粉々に砕いていった。病院に駆け付けたときは、間に合ったようで、婆ちゃんは、まだ息をしていた。しかし、言葉が出なくなっており、足も冷たくなっていた。僕はそんな婆ちゃんの姿を見て、何も言えなかった。あのときの胸の苦しみは、今でも忘れられないものだ。何分か経ち、婆ちゃんは大丈夫そうだったので、兄弟と父さんとで家に帰ることにした。だが、家についてしばらくしたとき、一本の電話がかかってきた。何を話しているのか分からなかったが、婆ちゃんに何かあったという事だけは気付いていた。

僕たちが病院に駆け付け、部屋に入ったときには、もう婆ちゃんは亡くなっていた。間に合わなかったのだ。僕は初めて人の「死」というものを見た。まるで眠っているかのようで、体をゆさぶったら起きてくれるんじゃないかと思ったりした。

あまりにも唐突すぎて涙が出なかった。まわりの人も泣いていなかった。「婆ちゃん大変やったね。ごくろうさま。」という声が聞こえたり、皆、笑っていたりしていた。

亡くなった婆ちゃんの病室を去り、車で家に帰ることにした。そんなとき、兄が急に泣き始めたのだ。

「最後まで一緒にいてあげられなかった。」と。気づけば、弟も声を

出さずに泣いていた。

そんなとき、母さんが言った。

「婆ちゃんは今もうあんたたちには顔見せられんけども、婆ちゃん家におるし、大きい声で「ただいま」って言ってくれ。」って言っとつたよ。」

婆ちゃんは九十歳と少しの年月を生きた。ということとは、戦争の時代の生き抜いた人となる。そんな婆ちゃんをよく僕たちに「ただいまって言ったか。」と聞くことがあった。あの時代を生き抜いた人だから、「ただいま」の一言がよほど大切に思えたのだらう。

「ただいま」って言っても「おかえり」っていう声、あんまり聞かえなくなつたね。寂しくないか。」と聞かれた事がある。僕は迷わず「いいえ。寂しくないですよ。」と婆ちゃんが言い残した言葉を鮮明に思い出しながら、本当に寂しくないかのよう、明るく答えた。

みなさんは、毎日、学校から、買い物や遊びから、帰ってきたときには「ただいま」と言っているだろうか。僕たちには帰りを待つてくれている兄弟、両親、お爺ちゃん、お婆ちゃんがいると思う。どうかたった一言だがその一言を大切にしたい。

あの日から、僕たちは毎日、大きな声で、「ただいま」を婆ちゃんに届くように叫ぶように言っている。

この先、何があっても婆ちゃんが言い残してくれたあの言葉を忘れないだらう。

何かがあつて、何かの大切さを知れることが多いと僕は思う。人の大切さ、僕が学んだような言葉の大切さ、物の大切さ、いろんな大切さがあり、それは失つてから始めて気づくかけがえのないものだ。これからの人生の後悔のないように生きていきたい。一言を大切にしたい。

……

石川県教育委員会





「ヤッター」「おめでとう」と、周りから聞こえてくる喜びの声。もちろん私も嬉しかったけれど、素直に心から喜ぶことはできませんでした。

私は今年の夏、弓道部を引退しました。今振り返ってみれば、この「部活動」を通して、たくさんのことを学び、たくさんのことを身に付け、たくさんさんの感動と喜びを味わい、私にとってはなくてはならない大切な時間だったなと思います。思えば、中学校に入学してから部活動を決める時、悩みに悩んで入部することになった弓道部。初めは不安な気持ちでいっぱい、本当にこの部活を選んで良かったのだろうか。と思うこともあったけれど、今となっては後悔なんて一つもないし、弓道部で良かった！という思いしか私の心の中にはありません。

一年生の入部した年頃の頃は、体力と精神力を鍛えるために、毎日厳しいトレーニングにたえ一生懸命頑張ってきました。夏休みの前からはゴム弓というものを使って、先生や先輩方から弓道の基本動作を一つ一つていねいに教わりました。そして、夏休みに入ると実際に弓を持ち、素引きや崖打ちというものをしてあげた先輩に少しずつ近づいていきました。自分たちも弓道についての知識や理解が深まってくると、周りの友達と教え合ってお互いのレベルを高めてきました。一年生の十一月には、初めての大会である「石川県中学生新人弓道大会」がありました。すごく緊張して戸惑う中、自分なりに精いっぱい引いたことを覚えています。それから二年、三年と様々は大会で頑張ってきました。しかし私はこのような大きな場で何一つ成績を収めることができませんでした。

そして、三年生の引退を決めることとなる「石川県中学校体育大会」。私は三年生になってから、今まで以上に頑張りました。練習でも思うような結果を出すことができず、悔しくて悔しくて空いている時間を利用して、鏡の前で一つ一つの動作、形を確認しました。休みの日でも自主練があるときは積極的に参加したり、家にゴム弓を持って帰って時間が空いても体がにぶらないように練習したりするなど、

自分なりの努力はしました。つらくなって感情をおさえきれず、思わず泣いてしまいみんなに迷惑をかけてしまったこともありました。しかしその努力は報われず、私はこの大会の選手に選ばれることはなく、補欠となってしまいました。家に帰るまでの帰り道、たくさん泣きました。

そして迎えた大会当日……。この大会は各学校の選抜メンバーが集まる、私たち弓道部にとっては最も大切な大会です。さらに、この大会で優勝すると、全国大会に出場できるということ、どの学校もすごく気合が入っているのです。緊張感がいつも以上に漂う中……。なんと、私たち宇ノ気中学校女子弓道部は団体で見事に優勝し全国大会出場を決めたのです。

「ヤッター」「おめでとう」と、周りから聞こえてくる喜びの声。複雑でした。喜びたいのだけれど、どこか素直に喜ぶことのできない自分がいる。本当に複雑でした。

しかし、こんな私を変えてくれる一言があったのです。それは、この大会が終わった後、顧問の先生の話の中にあつた一言でした。『この優勝は、みんなが今まで支え合ってきたからこそその結果です。みんなでつかみ取った優勝だということを忘れないでください。』私はハッと思いました。今まで心の中にあつたモヤモヤが消え、スッキリしました。そして、忘れかけていた一番大切なことを、思い返すことができたのです。

大事なものは結果ではない。私がこの部活動を通して学んだこと。それは、何事にも一生懸命にあきらめない「努力」。

そして、自分自身を支えてくれた人への「感謝」の心を大切にすること。この「努力」と「感謝」を強く心に抱き、これからの人生を歩みたいと思います。





三月。私に十三歳下のいとこができた。その赤ちゃんは、とってもかわいくて、とっても小さかった。強く握れば壊れてしまいそうなくらい、小さかった。そこで、私は命の大切さに気づくことができた。

二月。一月からお腹の中の映像を見せてもらっていた赤ちゃんが、とても大きくなっていった。どれが何なのかわからないくらいで、やつと人の形をしているくらいだったのに。「これが私たちみたいになるの？」そう、毎日思っていたのに、一月から二月にかけて、だんだん大きくなっていった。もう、私たちと同じ形をした人だった。その成長を見てみると感動した。

そして三月。つらい思いや大変だったのだと思うが、おばさんのお腹から、赤ちゃんが生まれた。それは「感動」この二文字でしか表せない。というか、それでも足りないくらい気持ち胸にあふれてきた。実際に生まれる瞬間を見たわけではないが、今までの成長を経て、誕生するということが、とても感動的だった。

そして、四月。今、その赤ちゃんは、またいちだんと大きくなっていく。それでもまだ小さくて、軽くて、すぐに壊れそうだ。やさしく持っていないと、すぐにどうかなってしまいそうなほど。その体で、精いっぱい泣くのだから、私の方が心配になる。

こんな思いになったのは、初めてだった。私に妹がいるが、四歳下なので、妹が生まれた時は、お姉ちゃんになったという気持ちでいっぱい、ただただうれしかった。けれど中学生になった今、人の命を考えられるようになり、生まれた赤ちゃんに対して、四歳の私とは違った感情で見えていた。命とは、こんなにもはかないものなのか、こんなにも小さいものなのか、そして、こんなにも大切なモノなのか、と。こんな小さい体を動かしているのは、その体の中にある命で、それがなくなれば、もう、いつもうるさいと思っていた泣き声だって、少し何か言ったかなと思ってみんなが集まって聴いた声だって、こんなにいっぱいいるんだったら、サッカー選手になるんじゃないと思えるほど動く体だって、聴けなくなるし、見れなくなる。ただ、そこに体が

ある、それだけなのだ。こんなに命が大切なんだと実感した。私たちも、ここから今の自分があるのだと。

最近、自ら命を絶つという話を、ニュースや新聞などで、よく目にする。その人たちは、自分の命を、大切な命ではなく、いらぬ命だと思い、してしまった行動なんだろうと思う。しかし、いらぬ命も、捨てていい命も、なくなっていく命もない。もし、そんなことがあるのなら、初めから生まれていないと思う。一人一人の命は、とても尊い命なのだ。もう一度、命を見つめ直してほしい。そうすればきっと、自分の命の大切さに気づくはずだ。

そして、自ら命を絶つということには、絶対に理由があることを忘れてはいけない。悪口を集団で言われたり、いじめをされたり。そういうことが、生きることをイヤにするのだと思う。他にも理由があると思うが、一番私たちに近い問題といえば、これだろう。だから、今、自分が楽しむことを優先するのではなく、人のことを考えた行動をしてほしい。私自身も、人にやさしく、強い人になりたい。他の人の命を大切にできる人になりたい。

今回、私は赤ちゃんの誕生から、命の大切さを学んだ。授業ではなく、身近な体験だからこそ、心に感じることもあると思う。だから、自分の周りを見つめて、身近なことで感じてほしい。命とはどれほど大切なモノなのかということ。そして、自分の命はもちろん、他の人の命を大切にできる強い人になりたいし、みなさんにもそう思ってもらいたい。





“I have a dream.” 皆さんはこの言葉を知っていますか。この言葉は黒人差別撤廃のために闘った、アメリカのキング牧師の言葉です。世界の人々に、夢と希望を与えたこの言葉とは比較にはなりません。私にも夢があります。

それはいつか、多くの情報をたくさんの人のもとに届け、人々の生活に潤いや活力をもたらすことによって、誰からも好かれるアナウンサーとして、活躍することです。

私がアナウンサーになりたいと思ったきっかけは、あるテレビ番組で司会をしているアナウンサーに目がいった時のことです。その場の流れを滞らせることなく、自然に番組を進行していく姿を見て、素早い対応力と人を引き込むような話術に強く惹かれ、憧れるようになりました。

私は中学校に入って放送部に入部しました。放送部では、春にNHK杯全国中学校放送コンテストに挑戦し、毎年入賞者を出していました。初めて全国大会入賞者のCDを聞いた時は、鳥肌が立つくらいそのレベルの高さに圧倒されました。そしてそれと同時に、いつかこのレベルまで到達してみせる！という強い対抗心も芽生えました。一年生の時は、賞をとりたいた一心で毎日夢中で練習しました。しかし結果は県大会落ち。あんなに練習したのに、こんなにも難しいものなのかと実感しました。

そして二年生になって、自分が朗読の方に向いていることに気づいた私は、特に朗読に重点をおいて練習し始めました。本の選定や読み方の工夫が、以前とは違って色々なことを考えながら、練習する自分がいました。結果は県大会優良賞。目指していた優秀賞には届きませんでした。積み上げてきたことが入賞という形で目の前に現れ、夢へ一歩近づいた気がしました。

今年三年生になって、私は部長として部を引っ張っていく立場になりました。そして、コンテスト練習開始の時期、生徒会の仕事が重なった私は大きく出遅れました。課題図書も決まらず、読む場所も二転

三転し、やっと決めた自分の朗読は何度聞き返しても、納得できるものではありませんでした。そればかりか、昨年よりうまくなっている二年生や、今年入ってきたばかりの一年生の朗読やアナウンスの上手さに私は驚きました。自信を持ってどんどん上達していく後輩達。後輩に負けたくないという思い、最上級生であり部長であるというプライドやプレッシャーに押され、私は陰でよく泣くようになりました。泣いても何も変わらない、そうわかっていながらも焦りと不安に押しつぶされそうで、涙があふれてとまりませんでした。

私は誰もいない放送室で、一人全国大会のCDを聞きました。初めて聞いた時のあの感動・その時の思いが、再び胸に蘇ってきました。もう一度この読みにチャレンジするんだ。その時から、また純粋に夢に向かう自分に戻れた気がします。

夢は、悩んで立ち止まり、それでも努力しようとする人の後ろにいてくれて、いつも自分の背中を押してくれる存在です。そして夢があるだけで、毎日の生活が楽しく充実していると感じられます。

私は先日、全国大会の報告を受けました。残念ながら、全国大会へは行けずとても悔しいです。でも、夢はまだまだ先にあります。いや、数々の壁を乗り越え、夢という扉をあけると、そこにまた大きな壁が現れるのかもしれませんが。それでも私は、この三年間で経験したことを心の糧として、これからの夢への道を歩んでいきたいと思います。

“I have a dream.”
あなたに夢はありますか？





奨励賞 「ボン」から始まったこと

北陸学院中学校 二年 吉田 美佳子

二月の寒い日曜日の朝、なぜか父が、母の車を洗車していた光景を今でも覚えています。その父が突然、「お母さん、早く来て！」と大きな声を上げ、その声に驚いて、私も一緒に表に出ると、父が車のボンネットに耳を近づけ「ここから、何か声がする」と言うのです。ホースの水をかけると、かすかに、でもはっきりと「ンギャア」という低い声が聞こえてきました。何が出てくるかわからないと思った母と私は急いで車の中に避難し、父だけを外に残して車のボンネットを開ける準備をしました。父は困った顔をしていたのですが、母は「行くよ！」の声と同時にボン、とボンネットを開けました。すると、中から茶色の塊がぴよんと飛び出て車の下に入り込みました。車の下をのぞく父が「猫だ」と教えてくれました。のぞくと、小さくうずくまる猫が一匹。これが我が家に初めてやって来た猫。「ボン」との出会いでした。

推定年齢十歳以上のメス猫。毛づやがなく、やせ細って体重が3kg程度。「ボン」は腎臓に病気を持っていて、週に数回、病院へ行かなければならない体でした。食べることが出来ない時には注射器を使って餌を食べさせたり、手で口を開けて薬を飲ませたり、初めて動物と暮らす私達にとって、それらの行為は格闘のようなものでした。きつと「ボン」にとっても拷問であったにちがいません。出会った時、猫と暮らす楽しい生活を夢見た私達家族にとって「ボン」との生活は、予想外の展開でした。「死」に向かうことをどこかに意識し、点滴につながれる姿に辛い思いをすることもありました。そんな「ボン」と私達の生活は約四年間続き、「ボン」は、家族みんなに看取られて天国へ旅立っていきました。ふらつとやって来た猫という小さな命が、私達家族の中にどれほど大きな存在であったか、失って初めてわかるという愚かな思いをしました。「ボン」の残した餌や毛布やおもちゃの一つひとつに「ボン」の面影を探す毎日でした。病気を知ってから、覚悟はしていた命でしたが、その死は、私にとっては突然で、しかも大きな悲しみでした。

私達は様々な形の出会いを通して、それぞれの時を過ごしてきました。出会いの時は、私達の日常の中に何気なくやって来て、しかもその中では、その時その時の重要性を私達に示してはくれません。「ボン」が餌をねだりに来た時や宿題をしている教科書の上に座った時にも、面倒だと感じたこともありましたが、私にとつての中学校生活も同じです。友人とたわいもないおしゃべりをしたり、笑ったり、けんかをしたりと何気ない時の連続で、今という時間が二度と帰ってはこない大切な時だということをつい忘れてしまっています。もしかしたら、「ボン」は、そんな私に今という時の大切さ、そして、出会うことの素晴らしさを伝えるためにやってきた猫だったのかもしれない。

今、我が家には三匹の猫がいます。一匹は飼い主が飼えなくなった子、もう一匹は譲渡会で私と目があつた子、そして三匹目は、八匹も生まれて困っていた人から引き取つた子。それぞれに親も生まれもちがう猫たちですが、三匹が寄り添い、元気に走り回っています。「ボン」から始まった猫たちとの出会いは、今でも「ボン」が導くように我が家に続いています。そんな猫たちを見ると私はとても幸せで、この時を大事にしていきたいと願います。

私達は、地球上に存在するすべてのものたちと出会うことは、けつしてありません。だからこそ出会ったことは貴重で、すばらしいのです。私達はせっかく出会えたかけがえない存在同志です。互いがその出会いに感謝し、共に過ごす時を大切にすることができれば、出会った仲間達と幸福な世界を築いていけるのだと思います。





「おはようございます。」
 皆さんは、家族に挨拶はできていると思いますか。友人や地域の方とはどうでしょうか。また、挨拶なんかしなくても良いと思ったことはありませんか。

僕は、生徒会活動で挨拶運動をしています。

僕の挨拶に対して、挨拶を返してくれる人と、返してくれない人がいます。挨拶を返してくれる人の中には、明るく、元気のいい人もいますが、だるそうに感じる人もいます。また、挨拶を返してくれないと思った人の中には、声が小さくて、返した挨拶がこちらに聞こえない場合もあるようです。

僕は、挨拶とは人と人との重要なコミュニケーションの一つだと思います。従って、挨拶したけれど、声が小さくて相手に伝わらなかつたとすれば、気持ちは相手に伝わらないこととなります。また、だるそうに挨拶をすれば、その様子が相手に伝わるので、どうしたんだろうと思ったり、いやな気持ちになったりすることもあると思います。

特に、朝の挨拶は、一日の始まりです。よいスタートを切るためには、相手のためにも、自分のためにも、気持ちの良い挨拶をするように心がけることが、大切だと思います。

「挨拶などする必要が無い。」とか、「面倒くさいからしない」と思って挨拶をしない人がいるかもしれません。

僕も以前は、「気を使つてまで挨拶をする必要があるのか」と思っていました。しかし、ある体験を通して、挨拶の大切さを知ることが出来ました。

それは、修学旅行で外国人に、自分や、日本についての紹介文である「ピースメッセージ」を渡そうとしていた時のことでした。

僕は、外国の人と話したことが無いので、自分の英語はしっかり伝わるだろうか、急に声をかけても大丈夫だろうかなどと考えると、とても不安になり、自分から声を掛けられず、時間はどんどん過ぎていききました。

このまま渡せずに終わってしまうのではないかと焦り始めたとき

でした。一人の外国人男性が「Hello」と挨拶をしてくれました。その時の挨拶はとても明るく、声もはっきりと聴くことが出来ました。すると、さっきまであった不安が、うそのようになくなりました。元気付いた僕は「Hello」と挨拶を返しました。そこから、質問をしたり、ピースメッセージを渡したりすることが出来ました。外国の人との、英語による会話は初めてであり、発音もうまく出来なかつたので、とても緊張しました。しかし、若いアメリカ人は、僕にでもわかるように、おだやかに話してくださり、最後には、写真を撮ることも出来ました。ささやかながら、印象深い国際交流になりました。それも、たった一言の「Hello」という挨拶で。

その一言が、世界をつないだんだと実感しました。

そう思ったとき、挨拶することを躊躇し、自分から話しかける勇気がなかった自分が恥ずかしく思いました。

この体験から、挨拶には、挨拶をする人の心が、表情や声の調子にもつていけば、初対面の人でも相手を勇気付けたり、心を拓こうとする力になるのだなあと思いました。

僕は、挨拶運動に、このことが活かされていたか振り返ってみました。挨拶をすることが恥ずかしい人や、挨拶をしたくない人に対して、どう対応してきただろうか。挨拶ができる人も、挨拶が苦手な人も、自然に挨拶が出来る環境づくりに、こころがけてきただろうか。

改めて考えてみると、これらのことを改善することが出来れば、お互いに、相手のことを思いやり、協力することが出来る最高のすばらしい学校になるのではないのでしょうか。容易なことではありませんが、課題解決に一步でも近づきましょう。

「ありがとうございます。」



大変素晴らしい主張をしてくれた十六名の皆さん、本当にありがとうございました。

著しいスピードで変化している社会をよりよく生きるためには、次代を担う中学生のみならず、今回の発表のように、日常や社会の出来事に対して、問題意識を持ち、自ら課題を見付け、しっかりと考え、自分なりの答えや結論を導き出すこと、そしてそれを自分の言葉にして表現し、実行することはとても大切なことです。

皆さんは、この県大会に至るまでに、自分の心に残ったこと、感じたことを、他に伝えるために、話しの展開や表現の仕方を工夫するとともに、聞く人の心に響くよう、何度も繰り返し練習をしてきたことと思います。

そのため、どの発表も中学生らしくさわやかな語り口調の中に、その人らしさが表れ、思いが明確に、しかも豊かに表現されており、まさに「少年の主張」というにふさわしいものでした。

また、発表の内容についても、

・「今の自分に向き合い、より積極的に取り組もうとすること」「しっかりと考えを持ち行動しようとする事」「夢の実現に向かって挑戦すること」など、自分自身を高めていこうとする内容

・「心のこもった挨拶や思いやりのある伝え方に心掛けること」「直接会話することやコミュニケーションを大切にすること」など、人と人とのかわりの中でよりよく生きようとする内容

・「命の尊さやかけがいのなさをしっかりと見つめること」「出会いの喜びを大切にすること」など、命や出会いを大切に、たくましく生きていこうとする内容

・「地域のために今できることを実行しようとする事」「平和を守り

広げる責任をしっかりとつこと」など、よりよい社会や生活を実現しようとする努力する内容

など、自分の身の回りから見付けた様々なテーマを取り上げ、皆さん自身の視点や言葉で、実感を持って語っており、物事をどのように捉え考えているのかが本当に良く伝わってきました。また、皆さん自身もお互いの発表を聞き、大いに共感できたのではないかと思います。

今後、この「少年の主張」での貴重な経験を生かし、自らの言動に自信と責任を持って活躍されとともに、さらに高い志を持って、それぞれの夢や希望の実現に向けて歩まれることを期待しています。

本日は、素晴らしい発表を聞く機会をいただき、改めて感謝申し上げます。

この大会に参加された皆さん、ご支援いただいた先生方やご家族の方々、さらには、この大会の開催にご尽力いただいた関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

平成26年度 少年の主張石川県大会概要

1 趣 旨

中学生が、日常生活での体験や考えを自分自身の言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、中学生世代の社会参加意識の醸成を図るとともに、多くの大人に現代の中学生への理解を深めてもらう。

2 主 催

石川県 石川県教育委員会 石川県健民運動推進本部

3 後 援

石川県市町教育委員会連合会 石川県小中学校長会
石川県PTA連合会 石川県少年団体協議会
明るい社会づくり運動いしかわ 石川県青少年育成アドバイザー協会

4 日 時

平成26年9月27日（土）午後1時30分～

5 会 場

石川県青少年総合研修センター（金沢市常盤町212-1 TEL076-252-0666）

6 出場資格

県大会へ出場する生徒は各地区大会で選出された生徒とし、在籍中学校長へは健民運動推進本部より県大会参加通知をする。

7 発表内容（日本語で発表すること）

- (1) 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。
- (2) 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。
- (3) テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や提言など。

以上のうち、考えていることや感じていることを自由な発想と、飾り気のない言葉でまとめたもの。

8 表 彰

最優秀賞（石川県知事賞） 1名
優 秀 賞（石川県教育委員会賞） 2名
奨 励 賞（石川県健民運動推進本部長賞） 13名

9 その他

- (1) 発表内容は、記録集として発表者、中学校長、青少年団体等へ配付する。また、広く同世代の少年及び世代を越えた人々の意識を啓発するために、県ホームページにも掲載する。
- (2) 最優秀賞受賞生徒は、独立行政法人国立青少年教育振興機構が11月に開催する「少年の主張全国大会」出場者選考のための全国大会代表審査委員会へ推薦される。

県大会審査基準

1 採点方法

100点満点とし、各項目の配点は次のとおりとする。

- (1) 論旨・内容 60点
- (2) 表現力 30点
- (3) 態度 10点

2 採点上の観点

(1) 論旨・内容について

- ア 若者らしく新鮮で意欲的な主張であるか
- イ 主張の内容が明確で、論旨が一貫しているか
- ウ 主張の内容が共感と感動を与えるか

(2) 表現力について

- ア 聞きやすいか
- イ 話しぶりに熱意と迫力があるか
- ウ 聴衆に共感と感動を与えるか

(3) 態度について

- ア 中学生らしく、さわやかで落ち着いた態度であるか

3 時間超過の場合の減点

各発表者の持時間を5分とし、持時間を超過した場合はその時間の長さに応じて減点をする。(5分30秒以内は減点しない。5分30秒を超え6分以内は1点、6分を超えると2点の減点をする。)

審 査 委 員

(1) 審査委員長 小野島 政 孝 (石川県市町教育委員会連合会 副会長)

(2) 審査委員 下 出 博 明 (石川県青少年育成推進指導員連絡会 会長)

東 友起子 (石川県PTA連合会 副会長)

牧 野 哲 栄 (石川県少年団体協議会 副会長)

渡 邊 毅 (石川県小中学校長会 理事)

才 鴈 一 博 (石川県教育委員会事務局学校指導課 課参事)

地区大会概要

(1) 加賀地区大会（加賀市、小松市、能美市、能美郡川北町）

「第33回 加賀地区中学生意見発表大会」

主 催：加賀地区市町教育委員会

共 催：石川県健民運動推進本部

日 時：平成26年8月30日（土）13：30～

会 場：能美市根上総合文化会館

審査員：高橋 正英 （小松教育事務所長）

坂本 和哉 （加南地区教育委員会連絡協議会長）

中嶋 敏一 （能美市教育長）

新川 淑恵 （能美市学校教育研究会長）

本多 他家志 （能美市立図書館長）

発表者（17名）

演題	中学校名	学年	氏名
「食」の大切さ ～これからの私たちにできること～	能美市立辰口中学校	3	戸井 雅斗
本当の平和とは	小松市立御幸中学校	3	中江 彩月
人をつなぐ 挨拶	川北町立川北中学校	3	佐々木 尊理
私が変わった瞬間	加賀市立山中中学校	3	後藤 春香
本当の友達	小松市立芦城中学校	2	松原 瑛海
空手を通して見えてきたこと	能美市立寺井中学校	3	浅井 小町
人と人との本当のつながり	加賀市立片山津中学校	3	木村 菜摘
平和を思う	能美市立根上中学校	3	中田 恵莉香
妹から学ぶこと	加賀市立橋立中学校	3	戸井 あかり
私の思いを強くする	小松市立御幸中学校	3	坂下 未宙
人と人との関わり ～いじめについて～	能美市立辰口中学校	2	小杉 和奏
言葉の力	加賀市立東和中学校	3	田辺 瑠唯
不安とプレッシャーに打ち勝つ	川北町立川北中学校	3	鵜島 那映
将来に向けての第1歩	能美市立根上中学校	2	西田 茜
加賀温泉郷の今	加賀市立山代中学校	3	神田 潤季
ロシア滞在で学んだこと	能美市立寺井中学校	2	西出 圭佑
祖父から学んだこと	加賀市立東和中学校	3	北市 李穂

(2) 金沢市地区大会 (金沢市)

第67回金沢市「中学生からのメッセージ」発表会

主催 金沢市教育委員会 金沢市中学校文化連盟弁論部

日時 平成26年8月31日(日) 9:00~

会場 金沢市教育プラザ富樫

審査員 石井かおる NHK金沢放送局アナウンサー

市内中学校国語科担当教諭

発表者(27名)

演題	中学校名	学年	氏名
テニスに明け暮れた日々	金沢市立長田中学校	3	米沢 希望
夢ここに舞う	金沢大学附属中学校	3	三村 咲絢
金沢市復興支援子ども交流事業を終えて	金沢市立芝原中学校	3	西村 稜
夢・心の糧として	金沢市立都跡中学校	3	川野 優里亜
個人情報扱い方を考える	金沢市立高尾台中学校	3	斉藤 迅
私の「仲間」	金沢市立医王山中学校	3	中邨 風夏
「つながり」ってなんだろう	金沢市立泉中学校	3	堀 恭子
私がいさつをする理由	金沢市立森本中学校	3	荒木 美藍
教育の目的	金沢市立額中学校	3	小田桐 瑠奈
将来は農業をするから	金沢市立野田中学校	3	奥名 俊介
真心	金沢市立紫錦台中学校	3	鈴木 菜都
やり遂げたとき	金沢市立小将町中学校	3	矢来 万里萌
感謝すること	金沢市立内川中学校	3	東 菜々子
優しさと信じる勇氣	金沢市立大徳中学校	3	鍛冶 美冴貴
「仲間」と出会って	金沢市立清泉中学校	3	西川 真菜
「ボン」から始まったこと	北陸学院中学校	2	吉田 美佳子
自分のためになるテストにするには	金沢市立城南中学校	3	駒井 琴恵
やってよかった	金沢市立北鳴中学校	3	倉坂 菜月
水泳を通して得たもの	金沢市立犀生中学校	3	中山 綾子
学校に行く意味	金沢市立浅野川中学校	3	山岸 遥香
伝え方にも思いやりを	県立金沢錦丘中学校	3	南部 未陽
しかられることに感謝	金沢市立鳴和中学校	3	井野 絵理香
差別のない未来	金沢市立西南部中学校	3	松井 百加
幸せへの切符	金沢市立高岡中学校	3	山下 恵里佳
私達のあたりまえ	金沢市立緑中学校	3	古田 ひろ子
友達とは	金沢市立金石中学校	3	西野 留那
私の宝物	金沢市立兼六中学校	3	尾崎 晶

(3) 能登地区大会（七尾市、羽咋市、輪島市、珠洲市、羽咋郡、鹿島郡、鳳珠郡）

「第46回全能登私の主張発表大会」

主催 第46回全能登私の主張発表大会実行委員会、七尾市教育委員会

共催 石川県健民運動推進本部

日時 平成26年8月24日（日） 9:00～

会場 七尾サンライフプラザ大ホール

審査員 松浦 顕雄（全国高等学校文化連盟弁論部常任理事）

荒巻 幸子（石川県中能登教育事務所指導課長）

藤沢 浩（七尾市教育委員会子ども教育課学校教育課長）

鳥居 貞利（七尾市公民館連絡協議会副会長）

佐原加津美（七尾市小中学校校長会代表）

発表者（11名）

演題	中学校名	学年	氏名
夢に向かって	七尾市立御祓中学校	3	松本 千雅
自分らしく	七尾市立朝日中学校	3	池田 瑠海
児童労働～世界の子供たち～	中能登町立中能登中学校	3	日下 和泉
責任と向き合っ	七尾市立田鶴浜中学校	3	北谷 真唯
て 青年よ、自由という名のもとに責任を持て	七尾市立七尾東部中学校	3	左藤 寿久理
感謝の気持ちを伝える	七尾市立朝日中学校	3	佐々木 彩乃
命の箱	七尾市立御祓中学校	2	山本 日菜子
ピンチをチャンスに変える	七尾市立中島中学校	3	福井 逸平
感謝の心	七尾市立能登香島中学校	3	武田 愛梨
0.01秒の世界	七尾市立七尾東部中学校	3	後山 愛
コミュニケーションの大切さ	輪島市立門前中学校	3	星野 泰代

(4) 石川中央地区大会 (かほく市、白山市、野々市市、河北郡)

「第24回(平成26年度)少年の主張石川中央地区大会」

主催 石川県 石川県健民運動推進本部

共催 白山市教育委員会 石川県青少年育成アドバイザー協会

日時 平成26年9月13日(土) 14:30～

会場 かほく市七塚生涯学習センター

審査員 遠田 敏博(かほく市教育委員会 教育長)

野川 徹(河北郡市校長会 副会長)

菅田 峰行(石川県教育委員会金沢教育事務所 指導主事)

川下 陽子(白山市PTA連合会 副会長)

芝田 信栄(石川県青少年育成アドバイザー協会)

発表者(14名)

演題	中学校名	学年	氏名
一言の大切さ	かほく市立宇ノ気中学校	3	北井 湧之輔
「努力」と「感謝」	かほく市立宇ノ気中学校	3	干場 結奈
みんなが楽しく過ごすためには	かほく市立河北台中学校	3	高田 珠里
夢は叶う	かほく市立高松中学校	3	岡村 未来
落ち着いてから見て考えること	内灘町立内灘中学校	3	中村 玲未
仕事について	内灘町立内灘中学校	3	永吉 由樹
誇り	津幡町立津幡南中学校	3	砂山 雄大
伝えるということ	白山市立白嶺中学校	3	笹山 明花里
大切なモノ	白山市立笠間中学校	2	上田 裕衣
今、私たちにできること	白山市立笠間中学校	3	前中 沙絵
人を喜ばせるということ	白山市立松任中学校	3	西川 未旺
私が考える「責任」とは	白山市立鶴来中学校	2	小田 あゆみ
描く	白山市立北辰中学校	3	池下 夏美
かけがえのない存在	白山市立北辰中学校	3	清谷 雪乃

子は宝～自分の命より大切なもの

福岡県 飯塚市立飯塚第一中学校 三年 山本 由菜

生まれたばかりの赤ちゃんを抱き、若いお母さんが感動の涙を流す姿をテレビなどで見たことがあると思います。ここにいる私たちも生まれたことをたくさんの人に喜んでもらい、たくさん愛情に包まれてきたはずですが、ところがいつの間にか、親に反抗したり、親の言葉に耳を傾けなくなっていますか。

私もいつの頃からか父の一言にイラッとしたり、「そんなこと言われなくても分かってる。」と思うことが増えてきました。しかし、それを言葉にしたことはありません。それには、理由があるからです。

私は今、父と弟と三人で暮らしています。母は、白血病にかかり、去年、四十四歳で天国へ旅立ちました。しつこきに厳しい母でしたが、たくさん愛情を注いでくれました。私が落ち込んでいる時も楽しくて仕方ない時も、話を聞いてくれました。常に私の隣には母の笑顔があり、今でもその笑顔を思い出さない日はありません。

日が経つにつれ、入院していた母の病状は悪化していきました。とうとう自分の力では立つことも、歩くこともできないようになりました。

母は、毎日日記をつけていました。その日記は、薬の副作用の吐き気やだるさ、死ぬことへの不安など赤裸々に綴られていました。その中に「きつい。でも子供たちのために病気に勝たなきゃ。子供たちの笑顔が見たい。」と書かれてあるのを見つけました。読んだ瞬間、涙があふれました。苦しい治療に耐えながら、私たちのことを思って病氣と闘っていると思うと胸が締め付けられるようでした。

私が病室を訪ねると、母はやせ細った手で私の手を握ってくれます。細い手から伝わる母のぬくもりを感じながら、あどどのくらい一緒に居れるのかと考えると、急に悲しくなり、母の前で泣いてしまいました。母も私を見て泣きました。私は、泣きながら母の涙を拭いてあげました。すると「由菜の笑顔が一番の薬だから笑って。」と言いました。私は泣きながら精一杯笑ってあげました。

それから一週間、何をしても母のことしか考えられませんでした。

担任の先生から、すぐ病院に行きなさいと言われた時、今まで感じたことのない嫌な予感がしたことを覚えています。病院へ向かいながら涙が止まりませんでした。だんだんと母の体が冷えていくのが分かりました。そして、家族に見守られながら、息を引き取りました。母の心臓が止まった後も、私はずっと手を握っていました。もつと一緒にいてあげれば、もつとありがとうを言えば、もつとお母さん大好きだよと伝えれば良かったと心の中で考えながら。

母のおかげで、今まで以上に人の気持ちを考えられるようになりました。私には十四年間という少ない時間の中でしたが、たくさん愛情を注いでくれた母がいたので、家族で協力しながら、今は毎日笑顔で過ごせています。母がいなくなった代わりに父が家事をしてくれていきます。また父も、中学三年生の娘にどう接していいのかきつと悩んでいると思います。そんな父の姿を見ると、とても文句を言ったり反抗したりすることはできないのです。父にはとても感謝しています。毎日疲れているのに必ず夕食を作ってくれます。母のような優しく包み込んでくれる愛情ではないけれど、子供や家族を守ってほしいという愛情が伝わってきます。これからも母がくれた愛情を忘れずに、父と弟と三人で力を合わせて母の分まで頑張って生きていきます。

中学生にもなれば、親や周りの大人に反抗したいこともあるでしょう。だけど、あなたのその言葉や態度が愛情を注いでくれた親を悲しませたり、傷つけたりすることに気付いてください。あなたを一番近くで見守ってくれている、かけがえのない存在なのだから。

母の日記の最後の方に、こんな言葉が残されていました。「子供は宝で、自分の命より大切なものだから。」と

みなさんも親の愛情に気づき、家族を大切にして下さい。



毎月第3日曜日は「家庭の日」です
家族とのふれあいを大切にしましょう

石川県健民運動推進本部

〒920-8580 石川県金沢市鞍月1丁目1番地
石川県県民文化局県民交流課内

TEL 076-225-1365 FAX 076-225-1363

ホームページ [健民運動](#) [検索](#)

メール kouryu@pref.ishikawa.lg.jp

この冊子は再生紙を使用しています